

橋本貝塚・柾形貝塚発掘調査学史

小原 一成

1 はじめに

宮城県のほぼ中央、太平洋沿岸部に位置する多賀城市では、これまで 900 か所を超える地点で発掘調査が行われてきた。その始まりは古く、1919 年（大正 8 年）の大代地区に所在する橋本貝塚（大代貝塚）（註 1）と柾形貝塚の発掘調査にまでさかのぼり、2019 年（平成 31 年）はこれらの発掘調査から 100 周年にあたる。本稿は、市内遺跡発掘調査 100 周年を記念して、2 つの貝塚に関連する記事を読み解きながら、当時の経緯と経過の概要を整理して提示することを目的とする。

2 橋本貝塚・柾形貝塚発掘調査前夜

（1）明治期の縄文貝塚研究開始と宮城県への展開

1877 年（明治 10 年）、東京帝国大学に招聘されたアメリカ人動物学者 E. S. モースが東京都大森貝塚を発掘調査し、近代日本考古学の幕開けとともに縄文貝塚研究も始まる。その後縄文時代研究は日本人種論が主要な争点のひとつとなり、貝塚の調査は坪井正五郎や八木奘三郎等の人類学者に引き継がれながら日本各地に広がりを見せる。

坪井らは宮城県にも来訪し、後に郷土史家として縄文遺跡の調査を積極的に進めることになる齋藤養次郎、遠藤源七、毛利総三郎らと親交が生まれる。坪井らに触発されるように、明治 40 年代には齋藤が宮城県石巻市宝ヶ峯遺跡、遠藤と毛利が同沼津貝塚等を発掘調査し、多数の遺物が発見される（藤沼 1981）。

（2）大正期の縄文人骨への関心と貝塚発掘の契機

続く大正時代になると、東北大学に松本彦七郎（大正 3 年：理学部）、長谷部言人（同 5 年：医学部）、山内清男（同 13 年：医学部）、喜田貞吉（同 13 年：法文学部）が相次いで赴任し、地域考古学の推進や後進の育成等の基幹的役割を担っていくこととなる。特に松本と長谷部は、自身の専門領域である古生物学と形質人類学の観点から、縄文

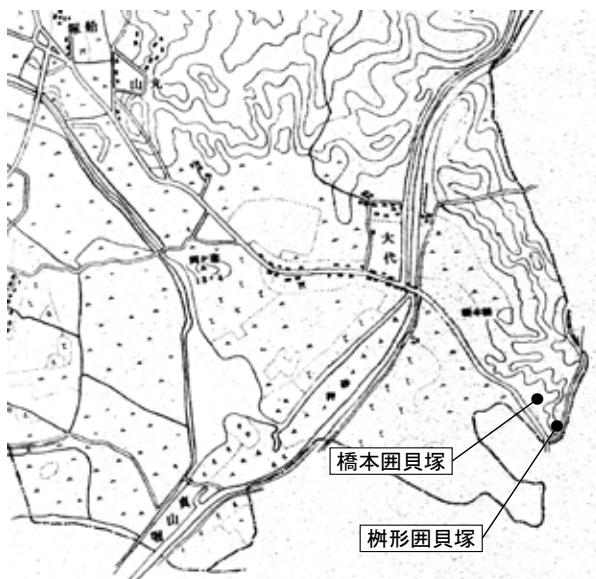
人骨の収集を主要な目的のひとつとして貝塚の発掘調査を積極的に行うこととなる。

貝塚から人骨が出土することは大森貝塚の発掘調査以来知られており、千葉県加曾利貝塚・堀之内貝塚、愛知県稻荷山貝塚等の発掘調査で類例が蓄積される。1916 年（大正 5 年）からは京都帝国大学（当時）による大阪府国府遺跡の発掘調査で多数の縄文人骨が出土し、1918 年（大正 7 年）には小金井良精により抜歯がある縄文人骨が報告される（小金井 1918）。これらの調査研究成果により、縄文人骨研究が全国的に活発化するとともに、骨等の有機物が良好に遺存する貝塚への関心がいっそう高まった。東北地方の貝塚も、明治時代に岩手県中沢浜貝塚で多数の縄文人骨が発見された事例等があり、早くから注目されていた。宮城県でも、1918 年から 1919 年にかけて松本らが宮城県登米市青島貝塚や同東松島市里浜貝塚を発掘調査し（松本 1919）、多数の縄文人骨を発見するなど成果が挙げられていた（小原 2005）。

1916 年に東北帝国大学医科大学助教授（当時）に赴任し、1918 年の松本による里浜貝塚の発掘調査に参加していた長谷部言人（第 1 図）は、1918 年 10 月に宮城県七ヶ浜町大木貝塚で人骨を収集するなど（遠藤・遠藤 1979）、縄文人骨の発見を目的とした貝塚の調査を開始していた。



第 1 図 大正 8 年頃の長谷部言人（東北大学史料館蔵）



第2図 昭和13年の大代地区周辺の地図
(長谷部 1919a・山内 1925等から貝塚の位置を推定)

3 橋本貝塚の発見と発掘調査

(1) 橋本貝塚の発見

橋本貝塚は、塩釜から七ヶ浜菖蒲田浜に至る道路沿い、貞山堀に架かる大代橋から東に5丁（約550m）に露呈する横穴からさらに半丁東側（約50m）の道路に面し、元々松林であった砂丘に位置する（第2図）。当時の地形は、道路より北側40mまで丘陵が伸び、南側の裾は両翼に分かれる。その間は底辺20m、高さ10mの三角形状に展開する緩斜面が形成され、貝塚の端はその底辺部分に立地する。1918年11月頃から地権者が開墾のために砂丘を削平し、1919年1月20日頃に南端を切り通した際に、横穴数基と貝塚の一部が露出した。この情報を清水東四郎から得た長谷部は1月30日に現場視察したところ、人骨が出土したとの話を聞き、既に墓地に再埋葬されていた人骨を掘り起こして実見した（長谷部 1919a）。この人骨発見が、長谷部の形質人類学的専門見地から橋本貝塚に興味を抱いた要因であり、翌月に発掘調査を実施するに至った契機であったと考えられる。

(2) 橋本貝塚の発掘調査

2月8日、長谷部は未開墾地を借用して貝塚の発掘調査を実施した（長谷部 1919a）。平面規模は不明であるが、地表から少なくとも2m掘り下げ泥砂層に達し、その上部に堆積する貝層は5~6

層存在すると観察する。人骨が出土した層は下から3層目の層もしくはその下の灰土層であると推測している。貝層はハマグリが主体であり、カキやカラスガイも見られ、獸骨は多くない。

東京大学総合研究博物館が所蔵する橋本貝塚出土資料は、土器と骨角器である。土器は完形に近いものを含む大洞C2式の壺・鉢・浅鉢と平底の製塙土器がある。骨角器は離頭鈸・固定鈸・刺突具・簪・加工痕のある骨片が見られる（多賀城市史編纂委員会編 1991）。このほか、糞石に類似した遺物も出土している（長谷部 1919d）。

長谷部が1月に来跡した際に確認した人骨は熟年男性と鑑定され、体幹及び上肢・下肢骨が認められるが、頭骨は発見されなかった。長谷部はこれらの人骨を観察し、出土地点とされる場所から約2m離れたところにある後代の横穴墓に属する可能性を疑いながらも、石器時代人骨の特徴を有していると鑑定している（註2）。

また発掘調査後に、橋本貝塚前方の砂丘で発見された頭骨も収集している（長谷部 1919b、諏訪他 2017）（第3図）。この頭骨は、1919年4月26日に岩手県細浦上の山貝塚で頭骨を発見するより前に収集したとされていることから、2月8日以降4月26日までの間に収集した資料と考えられる。この頭骨は上顎側切歯が抜歯されており、長谷部は石器時代の人骨の可能性があると推測するが結論には至っていない。また長谷部（1919b）では、挿図として頭骨と下顎骨を並べた写真が掲載



第3図 橋本貝塚出土頭骨（東京大学総合研究博物館所蔵 The University Museum, The University of Tokyo）

されているが、これらは別個体と報告されている。

一方、長谷部（1919c）では「余の採集したものの内、陸前宮城郡多賀城村橋本団貝塚所出の一下顎骨（六号、性不明）には抜歯の跡がない」と報告している。この時、側切歯の抜歯がある頭骨を既にしているにも関わらず、抜歯のない下顎骨のみを記述している点は、頭骨の時期比定に関する問題も考慮した可能性が考えられる（註3）。

上記のものを含め、東京大学総合研究博物館には合計4体分の橋本団貝塚出土人骨が保管されている（遠藤・遠藤1979）。これらのことから、長谷部は2月8日の調査以後も何度か橋本団貝塚の資料を得る機会があったと考えられる。

4 槵形団貝塚の発掘調査と糲圧痕土器の発見

（1）桝形団貝塚の発見と発掘調査

桝形団貝塚に関しては、長谷部の報告には触れておらず、後に発表された山内（1925）に詳しい。長谷部は、橋本団貝塚の発掘調査の際に、同貝塚より南東150歩（約90m前後）、道路の北側に展開する低砂丘の東辺に位置する貝塚を新たに発見し、これが現在桝形団貝塚と呼ばれるに至っている。

当時の状況については、橋本団貝塚が砂層に覆われているのに対し、桝形団貝塚は砂層中に形成されており、層序的に橋本団貝塚に後続する貝塚と考察されている。貝層は非常に薄く、貝殻や獸骨片を有する土器包含層の様相を呈している（註4）。長谷部は、橋本団貝塚を発掘調査した翌月の1919年3月16・17日に、数人の人手で桝形団貝塚を発掘調査し、石油箱1個分の遺物が出土した。

東京大学総合研究博物館が所蔵する桝形団貝塚出土資料は、多数の土器と少量の石器である。土器の多くは桝形団式の鉢・深鉢・高壺・壺等と製塩土器である。石器は太形蛤刃石斧と石製紡錘車である（多賀城市史編纂委員会編1991）（註5）。自然遺物は所蔵されていないが、『日本縄文石器時代食料総説』にはハマグリ・カキ・アサリが挙げられている（酒詰1961）。

（2）糲圧痕土器の発見

桝形団貝塚出土資料から底部に糲粒の圧痕がある土器（第4図）を発見したのは、山内清男である。山内は、1924年（大正13年）秋に東北大学医学部に副手として赴任し、長谷部の下で出土資料の整理を行っていた。出土土器の底部木葉痕を型取りしていた際に、4点の紡錘状の圧痕を発見したという（佐藤編1974）。これを糲粒の圧痕と推定し、石膏を作り松村瞭や草野俊助に送り鑑定を求めたほか、濱田耕作・河野常吉・小田島緑郎らに実見してもらい、糲粒であるとの言質を得る。

山内はこの糲圧痕土器を論拠とし、1925年（大正14年）に「石器時代にも糲あり」と題した論文を発表した。その中では、土器底部に付いた木葉の痕跡の観察が詳細に記述されており、この木葉を土器製作時の粘着防止又は移動のために下敷きとして用いたものとみなし、糲圧痕は土器製作時に介在した異物の痕跡と推測する。山内は、本論中では桝形団貝塚出土土器を縄文時代終末期に位置づけ、石器時代にも糲作農耕が行われていたと推定した。しかし、後年東日本の縄文晩期土器編年を整備する際に、大洞A'式に後続する弥生時代土器の特徴が多い「桝形式」として年代観を修正している（山内1930）。

なお、この糲圧痕土器は製塩土器の可能性が指摘されている（多賀城市史編纂委員会編1991）。山内（1925）には、糲圧痕土器の比較資料として200数十点の橋本団・桝形団貝塚出土土器の底部



第4図 桝形団貝塚出土底部糲圧痕土器（レプリカ）

を観察したことが記されており、山内が個人的に収集した橋本圓貝塚出土資料は全て製塩土器である（岡田・小澤 2009）。これらのことから、橋本圓貝塚出土山内清男資料は、畳圧痕土器に類似する比較関連資料として収集されたものである可能性も考えられる（註6）。

その後本貝塚出土遺物については、杉原莊介により单一時期の一括資料と推定され、「南関東に於ける小田原後期、北関東における野沢期後期」に並行する東北地方の弥生時代中期土器編年の標識資料として「柵形圓式」が設定された（杉原 1936・1939）。

5 おわりに

長谷部が橋本圓・柵形圓貝塚を発掘調査した1919年は、東北地方及び宮城県における縄文人骨発見の第一次ピークが始まった頃にあたる（小原 2019a・b）。橋本圓貝塚発掘ののち、長谷部は岩手県細浦上の山貝塚、大洞貝塚や青森県是川一王寺貝塚等の発掘調査を実施する。これら各地で収集した埋葬人骨を基礎資料として、縄文人の埋葬姿勢や頭位方向、抜歯風習や土器棺墓の研究を発表し、縄文時代葬墓制研究の先導者のひとりとなつた。橋本圓貝塚を紹介した記事の最後を締める「一般に貝塚を掘れば必ず人骨が出て来るものとも考へられる」（長谷部 1919a）との記述から読み取れるように、長谷部が貝塚調査の手応えを掴んだと考えられる橋本圓貝塚の発掘調査は、縄文時代の葬墓制から当時の精神文化や社会構造等を追究した先駆的な発掘調査として学史的意義がある。

また、長谷部や松本による貝塚の調査は、結果として考古学に関する豊富な学術資料の蓄積や層位的な発掘調査方法の確立等をもたらし、土器研究の進展にも大いに貢献した。その産物のひとつが柵形圓貝塚における畳圧痕土器の発見と言える。この発見は、弥生時代に稻作農耕が存在していたことが定説化される契機となった学史的に重要なものとして全国的に知られている。

本市においても、近年の多賀城IC付近の山王・市川橋遺跡で弥生時代の水田跡を発見したり（多

賀城市教育委員会 1997 等）、多賀城跡の五万崎地区で石包丁が出土したりするなど（宮城県多賀城跡調査研究所 1978）、弥生時代に稻作農耕が営まれていた痕跡が発見されている。柵形圓貝塚の発掘調査と畳圧痕土器の発見は、全国的な学史的意義はもちろんのこと、本市においても弥生時代に稻作農耕社会が存在していたことを先駆的に立証するものであり、地域史的にも極めて重要な研究成果である。

本稿の作成にあたり、相澤清利氏からご意見をいただきいた。画像の掲載にあたっては、東北大学史料館（第1図）、東京大学総合研究博物館（第3図）から資料を提供して頂いた。記して謝意を表するものである。

註

- (1) 橋本圓貝塚の現在の遺跡登録名称は大代貝塚であるが、本稿では学史的意義を重視し、橋本圓貝塚と表現する。
- (2) この人骨発見については、当時の河北新報において「大代の洞窟から人骨土器の新発見」の見出しで報じられ、長谷部の所見が掲載されている（『河北新報』大正8年（1919年）2月20日号）。
- (3) 東京大学総合研究博物館は、この頭骨を長谷部言人が最初期に収集した縄文時代人頭骨と評価している（諏訪他 2017）。
- (4) ただし、山内は柵形圓貝塚の発掘調査には参加していないことから、長谷部が記録していた当時の状況を読み解いたか、現地踏査等により状況を把握したものと考えられる。なお、1970年代以降の橋本圓貝塚及び周辺遺跡の調査により（多賀城市教育委員会 1987・1989・1993・1994・2012・2018、宮城県教育委員会 1975 等）、両貝塚周辺の遺跡の広がりはある程度確認できているものの、残念ながら長谷部が発掘調査した正確な位置は現在不明である。
- (5) 石製紡錘車のほか、須恵器片が3点出土しており、これらは混入の可能性があると推測されている（山内 1925）。
- (6) 当時はまだ製塩土器の認識はなく、同種の土器は「軽く脆く、無紋で巻上の痕著明な又は籠目のある土鉢形のもの」（長谷部 1919a）、「深鉢形粗面無紋土器」（山内 1925）等と表現される土器に属すると